

「協力のしかた」を考える

校長 森 和 久



今月の生活指導の目当ては「協力のしかたを考えよう」です。

教育の中で大切にすべきこととして「自立と協働」があるという

ことは、いつも申し上げていることですが、社会・世界に関わって、幸せに生きていくとともに、社会・世界をよりよくしていくためには、自分がしっかりとしていることと、人と協力することが不可欠です。もちろん人が生きていくうえで協力が大切なことは、狩猟採集の時代から普遍のことですが、よりグローバルな視点での「協力」が、個との関わりの中で重視されるようになったのは、比較的新しいことのように感じています。

今回の学習指導要領改訂のベースとなった考え方に、OECDが2000年代初頭に提起した「キー・コンピテンシー」（主要な資質・能力）の考え方がありますが、そこには、「異質な集団で交流する能力」、「自律的に活動する能力」が重要な能力として掲げられています。そして、「異質な集団で交流する能力」として、「A他者とうまく関わる、B協働する、C紛争を処理し、解決する」ことを挙げています。文化、信条、習慣、価値観等の異なる集団での交流・協働は、グローバルな視点では不可欠なことです。

一方「自律的に活動する能力」としては、「A大きな展望の中で活動する、B人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する、C自らの権利、利害、限界やニーズを表明する」が挙げられています。

「自らの権利や利害を表明」しつつ、「他者とうまく関わる」ことが求められているところが、まさに今目的であると考えられます。また、このことは実は子ども同士の関係であっても重要なことで、どちらかと言えば、集団の意思（雰囲気）に従う方向で行ってきた意思決定の在り方からの変化が求められているとも

言えます。

しっかりと自分を持ちつつ、他者とうまく関わる学習の場として、学校はとても重要な役割を担います。その練習の機会となるのが「共同学習（協働学習）」です。チームで共通の課題の解決を目指す学習は、互いの考えを伝え合い、方法論に折り合いをつける、役割分担をするなど、様々な協力の形が求められ、鍛えられます。課題を達成する能力が、個々にどれだけ身についたかを、「個別学習」「競争学習」「共同学習」で比較したところ、「共同学習」が最も効果があったという研究結果もあり、学習効果としても高いと考えられています。



自分で考え行動することをせずに人任せにしたり、自分の考えを伝えずに人に合わせたり、人の

考えに耳を貸さずに自分の考えだけを通そうとしたりするということは、その時々で誰しも経験することではありますが、協同的な学習においては、自分の考えを持つ場、それを伝え合う場を必ず持つようにします。また、異なる考えをまとめ上げ、チームとしての意思決定すること（例えば、異なる案をつくる、上位概念を見つける、折衷する、落としどころを見つけるなど）を言語化する体験をします。このことによって、「異質な集団で交流する能力」が高まっていきます。

「主体的、対話的で深い学び」が大切だと言われています。これは、一人一人が「主体的に」、「対話」しながら協力し合うことによって、「深い学び」を得るという学習の在り方を示した言葉で、「自立と協働」の力をつけるための学習方法とも言えます。コロナ禍の中、様々な制約はありますが、学習の中でも「協力の仕方を考える」場面を、できる限り多く持ちたいと考えております。

